

展覧会が終わった。もう何回もやっている展覧会ですが、なぜそう何回も展覧会をするのですか、なぜ個展なの、と聞かれると、考えてこのように思いついた。

○展覧会をしないといけない、人前にさらしださなくては

○描いた絵を壁に並べ何日間もじっくり見つめる

○絵を眺め、見つめ、自分を探す

○次の、明日の、絵を、自分を探す

絵画は単純な表現作品、他のジャンルの作品に比べれば、それこそ誰でも一目見ただけで全部が見えてしまう。見るヒトの理解力、文化力（これはちょっとうがった見方かな）の違いでそれぞれの脳に浸透するものは全く別物かもしれないが、とにかく全部見えてしまう。解説者がそばにいて「これはこうですよ」とか説明文<caption>「この作品は・・・」というものを見聞きし脳が一回転して「そういうことか」と楽しめるということもあるけれど、とにかく全部見えてしまう。即座に好きだ嫌いだというように答えが出てしまう、その後での耳に入り目に入る話や能書きは付録かもしれない。なんで何回も展覧会をするのとかかれりゃ。

「簡単にいやあ 次の 一手を 探すため」

「単純にいやあ オレの 生き方を みつめるため」

ということですかね、格好がよすぎますかね、格好がいいからこれでいいでしょう。

市の文学館という名称の建物の中にあるギャラリー、中心地、JR・阪急両駅からから徒歩 7,8 分と離れている、一般観客数が少ない、文学館を目的に訪れる方々が少ないうえ、その方々はオレの絵、抽象表現に興味の無い方が多い。半月の展覧会期間中 7 日間出勤した。最後の日に文学館を訪れてきた大きな紳士がぼそりと話しかけてきた。彼は文学が好きでこのような文学館を訪ね歩いたりしているらしい。「80 歳なんです この絵を見て友人を思い出しました わたしもその友人も信州出身ですが 彼 東京芸大の小磯教室で勉強していました」「おまえ 小磯教室で このような抽象的な絵を描いていて いいのか というと 笑ってました」「60 歳のときに自殺しました 仲のいい友達でした 絵は信州の いろんなところに 飾ってありますが・・・」話は大江健三郎にまでおよんで「ありがとう」と帰っていかれた。出勤した 7 日間に次から次にたくさんの方が訪れてくれうれしいかぎりありがたいかぎり。

若いころ、好きな先輩が自分の展覧会はもちろん、グループ展でもいつも画廊に居た、セビロを着、かしこまって挨拶をしていた。その姿を見てから以降なるべく画廊に出勤しよう、展覧会の時はいつも画廊に居ようと決めた。今回は期間が半月と長いので画廊にいる時間が全体の半分以上、留守中に来ていただいた方も多かった、会えなくて残念で申し訳が無い。もうこれで展覧会は何回目と聞かれてもわからないが、展覧会をするから絵が描ける、気持ちが高揚して次の絵が描ける。展覧会のたびに会場に絵を持って行ってまずはずらり並べ、「この絵はここ こいつはもちかえり ここはすき間を空けよう」などと考えながら「今回の絵は アカン のでは」とか「うまくいってるぞ」とかで大きくゆとりをもって飾っているようでも心はひやひやしております。もうひとつ、好きな先輩にならってなるべく一人での展覧会をするようにしています。大きな美術館にみなさんと並べて飾るとか、グループ仲間との展覧会も何度か経験しましたが、ひとりでやる展覧会がいい、<solo exhibition>個展がいい。日本の公募展のグループ、すごい絵を描くヒトもたくさんおられるが、あの組織なぜ群れるなぜ排他的、なぜ自画自賛する、不思議な世界だと思う。

展覧会が終わると次の展覧会のことを考えている。個人的には展覧会のプロデュースというか企画というような仕事の部分は好きではないけれど、誰もやってくれないので自分でしなければならない。来年 3 月末にいつものところで展覧会をする予定。もうそろそろ案内状等印刷物の準備を始めないといけない、出品する絵もどんどん描かないといけない、こんなにすることがたくさんあって「ねむい つかれた」なんていってられない。80 歳の方がどこからこられたかは知らないが、おそらく電車を乗り継ぎ、駅からここまで歩いてこられたと思う。オレなんかまだまだ一回りも年下の小僧っ子、泣き言はいってられない。

会期中、中西さんが二度も撮影に来てくれた「顔を撮る」「もっと もっと レンズに 寄って」「目 むいて」「昨日のは気に入らん」図版の写真ができました。

あれよあれよというまに寒くなってきた。寒いといってもあの夏の猛暑がなくなり、長袖のシャツがいる、布団をかぶって眠りたい、シャワーの温度を少し上げようという程度だけれど、涼しいというよりはやはり寒い为正解だろうという今日この頃。夏の間、体重が 72 キロぐらいで安定していたが、徐々に減りはじめている。「これは水のせい 夏は水をたくさん飲む オレの身体は 水ぶとり」といつもいっているが、もう一月もすれば 70 キロまで下がるだろう。体重とか体調とかは長い間同じようなサイクル「毎年 冬はこうで 夏はこうなった」と話していれば簡単にことがすんだのだけれど、最近は前のように同じようなサイクルとはいかなくなってきた、65 歳ぐらいから加速度的に体に変化してきている、いわゆる老化現象、誰もに訪れる老化がきているのだろう。

この一月ぐらい、安威川でのジョギングのスピードを上げるようにしている。「人間の身体は 無理をすると がんばらんと いかん」と「がんばれ指令 もっといけるぞ指令」が出るらしい、多少いじめぬくことで、若さが保てる元の体力が維持できるということらしい。この話を聞いて、夏の暑さでへこへこ走っていたのを、「ちょっとでも 歩幅を長く」「ちょっとでも 回転を早く」と努力している、とはいえ若者のようにはいかない、「へこへこ走りが ほこほこ走り」に変わる程度だけれど、気持ちの上では、早い、力強いと自負している。そういえば以前走っている時は「ハ～ハ～ ゼ～ゼ～」と息をあげていたが、最近は普通に呼吸をしていたように思う。最近のこの走り、久方ぶりにこの「ハ～ハ～ ゼ～ゼ～」を取り戻し、終わった時点で大汗をかいている。大汗をかいてから帰りにスーパーなどによって「ちょっと買い物」と店に入ると身体が冷える「これも 昔は そうだった 走った帰り スーパーで買物をすると ブルリとくる スーパーマーケットの店内は 涼しくしているのだ 生鮮食料品を 扱うところなんだ」てなことを思い出している。山に登っているので常に大汗をかいていると普段から思っていたが、この大汗が最近は少し減っている、だいぶ減っていると反省。人間の身体は汗をかいていじめてやるとそれに応え、活力が出てくるのかな、と納得。とはいえ運動のこと、スポーツのこととなるとからきしだめなオレである。63 歳ぐらいではじめたバドミントン、「あれなら なんとか できるのでは」と思っではじめたが、バドミントンも立派な球技、「足の運び ワン・ツー・スリー」のリズムを教えられるが「なんのことやら ちんぷんかんぷん」ともうひとりのカンの鈍い方と途方にくれていた体育館の思いでが懐かしい。身体を動かす体力はなんとかついていけたが、四年間でやめてしまった。そのてん登山はまだまだ続けている、ちょっと怖いところ、危険印のところは近づかない、急な斜面は丁寧にゆっくり歩く、腕でつかまえるところがあるとぐいとつかんで怖くはない、鎖であれ、梯子であれ、木の根っこであれ、目の前にグイとつかまるところがあれば安心だ。

先日の展覧会で、ちょっとこれも出してみようかと去年描いた絵をだした。30 号のキャンバスをおいて、大きな筆で、黒・白・グレーと順次絵の具を出し一気に描きあげた、こんな一気に時間もかけずに描いた絵もひとつぐらい並べてみようと思っ出品したが、意外と人気がいい、「すっきりしている」「いまふう」と好評だ。そんなこんなで、展覧会が終わった今、その一気描きの絵をいくつか作ってみた、いかがかな。本当に長いあいだ描いてきているのに、いまだに何がいいのか、どれがいいのか、どうすればいいのか、わからない。こういうことをよそのアーティストと話し合ったことはないが、大先生といわれる連中が大見得切って「キミの絵は ここがおかしいよ」「あなたのえは あそこがすばらしいねえ」とのたまうさまがうらやましい、「ほんまに わかつとるんかいな」と一抹の不安をだかえつつ、いやいや一抹どころか世間がほめる、仲間が持ち上げる「先生は まちがいない」と周りがいうものだから本人もその気になって「これはいい」「あれはまちがっている」なんてほざくも乙に澄まされていられるが、「そんなものは砂上の樓閣じゃ」といいたいね「ばかおやじめが・・・」といいつつ、オレにはそんなことを言う相手も、罵らなければならない知人もいない。当然ながら「君は 間違いない」とか「あなたは すごい」なんてのたまう知人もいない。「あいつは まちがてる」「あの男は おかしい」とぼやいているご仁はいるかもしれないけれど・・・。

ワルドバウアー著<虫と文明> Fireflies' Honey' and Silk by Gilbert waldbauer <人々の暮らしの中で寄り添ってきた虫たちのいとなみを、ていねいに解き明かす> この本を手に取りパラパラめくって「カイガラムシと染料」という目次に目がとまった。何年か前に実のなる木を植えてみようと思っていた。梅の木を買ってきた。ひざより少し背が高いぐらいの貧相な奴だったが、まだかまだかと眺めた甲斐があつてか、何年か前から実がなりだし、梅干・梅酒・ジャムと活躍している。もっと感動する話は、正月が過ぎ寒いと震えながら2月になると花が咲く、小さいピンクの花が咲く「おお 花だ」それまでの薄暗い景色の中に“カラー”が輝く、むろん水墨画の世界、モノトーンの世界はそれなりに素晴らしいのだけれど、ささやかな“カラー”がひとつふたつ現れると、カラーリストのオレとしては「きれいだ」と思わずつぶやいてしまう。「花が咲くのが 嬉しい」とは気恥ずかしいが。その梅の木にカイガラムシがつきだした、「いやだねえ どうしたらいい」と殺虫剤を何回も吹き付けてみたがなかなか取れない、「今年も いる」「へらで こそげてみるか」と金属ナイフでやってみると簡単に取れる、つぶれて赤い汁が出る「気持ちが悪いなえ」ぼやきながらもやっていたが、指の方がいいのではと試し、この方が早く簡単に取れ、木の枝全部についていた奴を毎日ちよつとずつ続けるとほとんどなくなり、翌年の梅の季節にはまったくカイガラムシはいなくなった。

前説が長くて失礼。1519年、黄金を奪い取ってやろうと進入したエルナン・コンチス率いるスペインの侵略者たちが、アステカの首都ティチティラン（現メキシコシティ）でモンテスマラアステカ王朝の宮廷人たちと対面したとき、アステカの人々は、鮮やかな赤に染めた典礼服で正装していた。当時のスペイン人たちは、その美しい染料のもとがコチニールカイガラムシという虫であることも、その染料がその後の300年にわたって、赤染料の中でも最も高価なものとなることも知らなかった。アステカの赤にいたく感銘した。一説によれば、その説というのも真偽は疑わしいが、染料の原料となる虫を始めてみたとき、スペイン人はそれが何だかわからなかったという。押収されたモンテスマラへの献上品の中には、スペイン人の垂涎の的であった金銀のほか、乾燥した小さな虫を詰めた小袋があった。最初スペイン人たちは自分たちにもなじみの深いシラミだと思った。スペインに征服される前のメキシコではコチニールの染料は貴重品だった。その色合いの豊かさと美しさは、当時知られていた赤い染料のどれをとってもかなわないものだった。16世紀から19世紀の300年間その染料をスペインがほぼ独占していた、コチニールは赤の染料の中で一番の人気を誇り最も尊ばれ価格は希少金属に次ぐほどの高価なものであった。現在では合成染料が開発され、コチニールをはじめ天然染料の需要が世界中で急速に冷え込んだ。今ではコチニールの赤は取引上“カーマインレッド”と呼ばれ、いまだに高価で希少だが主として食料・薬品の着色に使われている。カイガラムシは樹液を吸う口吻をサボテンの組織に突き刺し樹液を吸い続ける。染料に使われるのは妊娠したメス、サボテンにくっついているのを一つ一つていねいにはがし天日で乾かせば最高の染料になる。スペインがコチニールを独占していた永いあいだ、メキシコ・グアテマラで飼育されていたコチニールカイガラムシは、スペインとその植民地であるフィリピンに大量に出荷され、そこを拠点に諸外国に売却された。

コチニールで染められた布、手間ひまかけられた布や服を見たことがない、見ていてもわからないが、現在はあらゆる色がそろいすぎている。オレが使う絵の具は顔料で染料とは違う、「それじゃ染料と顔料はどう違うのか」と反対に聞かれてもこれまたわからない。現代は顔料も染料もあらゆる色がそろっている、その元となる色素は同じじゃないのかな、と思ってしまうほど色合い、色数、色々というようなところで区別がなくなってきているのではないのかな。合成の顔料も染料もできる以前、100年前の絵画も今と同じように生き生き色を輝かせている、洋画にしろ日本画にしろ同じように美しい。絵の具屋、染料屋にとっては合成の色ができるようになってますます色数が増え、ますますいい絵を描いてくださいといたいのかもかもしれないが、「絵なんて 絵の具が10色もあれば いい絵が 描けますよ」ということなんでしょうね。

考えてみると腹が立つのが、ヨーロッパ人は、金銀財宝をめがけて、アフリカへ、アジアへ、アメリカ大陸へ押しよせ、金銀財宝を奪い取るだけでなく、現地の住民を制圧し、滅ぼし、殺し、破壊してきた歴史が見える。今の中南米の元々の住民が築き上げた文化文明を破壊してしまった。現代のイスラム過激派が、住民を制圧し、滅ぼし、殺し、破壊しているのとは規模が違いもっと大きく、壊滅的だった。欧米人の皆さん、それはあかんよ。

◎「あ ほらほら 牛がいる 黒い牛」穂高平避難小屋の前にいる。懐かしいねえこの小屋、雪の日に1泊、テント泊もある。3時になってしまった、予定より2時間遅れている、秋の夕暮れは早い、槍平に着くころには真っ暗になっているだろう。「今晚は雨か 雪かも」観光案内所のおっちゃんが言っていた。◎黄葉は少しある、林道歩き。10月10日は雨が降らない日らしいが雲行きが怪しい、ずっと晴れていたのに・・・◎2年前緊急テントを張った場所発見。盆に上高地から岳沢(だてさわ)でテント、翌朝、前穂・奥穂高岳へ、「ヒトが多すぎるから 下ろう」白出(しらだし)まで下ってしまった、疲労困憊「水を確保して どこかで テントを張ろう」1年前に亡くなった澤山さんと寝たところだ。◎笑い声、ほっとしている、鍋を囲んでいっぱい飲んでいる、「やああ えらかった」暗い石ころ道、皆さんにはこたえたらしく、小屋に入るとやっと活気がでてきた。それこそコチニール染料：カーマインを薄めたような夕焼け、「吉谷が 酔って ほえている 手を振っている 吉谷 おまえも元気で やってるか」河原の白い石ころがごろごろ見えた「上に小屋ないですか」「あるよ」滝谷避難小屋に避難「今日は ここで」◎鍋は、白菜・えのき・しめじ・にら・もやし・あげ・豚・うどん、水は横からちよろちよろと特上の旨い水。焼酎1升、酒5号二日分なのに、ペースが速い。◎朝は、昨日の鍋にアルファ米の雑炊、コーヒー。期限切れアルファ米だけれど旨い、「あげる」もらった。中世の干飯(ほしいい)だ。◎雨の中「とにかく 槍平まで」と歩き出した。ピッケルのカラカラ音が鳴る、石ころの道、滑る、いやだねえ。今年は3000M級2山目だけれど、前回の仙丈岳は上のほうで雨、今回は朝から雨、ついていないねえ。◎皆さんは小屋でビールを買って帰るといって「ちょっとだけ 行かせてもらいます 雨なので すぐに帰ります」ひとりで登りだした、小雨ながら降っている「奇跡的に 雨がやんだら もうちょっと行けるが・・・」小屋を越えたあたりは、黄葉が終わりかけて枯葉が積もりかけている。◎空は薄暗いが、雨はポツリになってきた。積雪時は白い窪みをまっすぐ上へ歩いたように思ったが、今は岩ごろごろ、捻じ曲がった中木の枯葉が舞う、草が枯れ黄色にオレンジ色に、白っぽい石。◎風の音が録音されている、寒い、手袋をはずせない、ハイ松の低い緑、見るとすごい景色のはず「景色が 見えないなら 登るのはイヤ」とヒトはいうけれど、オレは「そりゃ～ 見えたほうがいいけれど 景色が 山が 緑が 岩が 見えたほうがいいけれど・・・」それでも歩くのが、歩くだけでも楽しい。◎「いやあ 最高だ 満喫だ」わがままいって、オレだけここまで登らせてもらったが、防寒具もない、合流が3時ころになりそうな時間なので、ここまで、ここで引き返します。頂上直下とはいかないが、多分あと1本か1本半で槍ヶ岳に着けるだろう。◎枯れ草だと思っていたが中のほうにまだまだ緑が残っている、その横に緑色の苔がたくさん生えている。草の緑はあと半月もすれば全くの枯れ草色、褐色になってしまうのだろうけれど、苔はこのまま雪の下で越冬し、雪が解ける半年以上先にはまた太陽を拝めるといような長いサイクルなのかねえ。◎滝谷近くまで帰ってきた。今日ぐらいの、ひと晩しよぼしよぼ降るぐらいの雨では増水して橋を流してしまうほどではないが、ここを渡渉といわれたらちょっと無理、ゴウゴウと流れている、倒れたらひとたまりもあるまい、右へ左へ転がされ蒲田川本流に行ってしまったらそれこそ終わり。橋といっても左右の大きな岩の上に角材を3本組み合わせただけ、水嵩がもう1M上がればこんな角材はあっという間に流されてしまう。そんな川を帰りを急いで渡渉するほうが悪い、今でさえオレならやめるのに、もう0.5Mも水位が上がれば、「そらあ 死ぬわ なあ」黄葉真っ盛り。太いダテカンバ、笹もある、トチノキがたくさん植わっている、天狗の葉っぱが黄色く枯れている、丸い葉が薄暗い空の光を透かしている。普通のイエローを中心に、レモン、デーブイエロー、オレンジ、褐色の太い幹、針葉樹の緑、白い石、きれすぎる水、赤い色は少ない、時々木の実、ツタウルシ、道しるべのリボン。◎アルプスの山は登りごたえがある、がつんと歩きつかれた、間もなく駐車場、また来たいねえ。「おお たくさんいる 子牛もいる」帰るころになって青空が出てきた、今回は天候にめぐまれなかったのが残念。◎「旨い 蕎麦屋と 露天風呂に 案内したい」「そばか・・・」と思ったが来てみて感動、いつも来る平湯のバスセンターの向かい、平湯神社の横、茅葺合掌作りの古民家、「かき揚げ蕎麦と岩魚」を注文しできるあいだに風呂。温泉は無料、黄土色の湯、管理人がいないので湯の温度が安定しないとか、今日は少しぬるい。普通の温かい蕎麦の横にカリカリに揚がった野菜天、岩魚は頭からがぶり、全身がぶり、旨い飯でした。皆さんは生ビール、オレは運転手。熊の敷物、少し小柄かな、熊の毛はコワイね、クマさん成仏ね。信州出発が3時になってしまった、帰り着いたのが12時前になってしまった。疲れたが面白かった、満足した。

友人のむつみさんの投稿より：寺山修司生誕 80 年記念音楽祭「冥土への手紙」にカルメン・マキさんが出るので行ってきました。“天井桟敷（劇団名）” 観たことがなかったのでとても興味がありました。でもその当時の私はとても寺山ワールドを理解できませんでした。何故かという私は寺山氏と同じ青森県で生まれ、10 歳までいました。幼稚園も小学校もカナダ人のミッションスクールに入れられ、土地の人達の生活をそんなに身近に感じられない状態だったのです。時々体感する寺山氏の描く東北独特のオドロオドロシイ土着の現実。祖母のマッサージに来る按摩さんは盲目（めくらと言っていました）その家の人達は津軽三味線をお花見の時などは弾きに出るのです。津軽三味線の迫力は子供心にもあまりにも悲しくて怖かった。また学校に行く途中の家にいる白子（差別用語かな？）の太ったお姉さん。座敷牢のようなところに閉じ込められているようだけど、時々抜け出し着物姿で外にぬうっと出てくるとそれは怖かった。それは寺山ワールドに描かれてる景色だと思う。10 歳で東京に越し中学生の頃はテレビの中のアメリカの洒落たホームドラマに憧れ、八戸で見た東北土着のオドロオドロシイ景色は忘れてしまいたいものでした。天井桟敷には後輩のカルメン・マキが入っていると頭の片隅にはあったけれど、近寄れないものでした。国立音大に入って山下洋輔一派と身近になったけれど、アングラやテント芝居には近寄れなかった。やっとこの年になってわかるようになるなんて、なんて遅いんでしょうね。コーラの瓶に入ってしまったイモリの歌とか、アメリカの歌とかまさに今の日本にはピッタリあうではありませんか。1 歩も 2 歩も先を見据えていた方なんだな～とつくづく実感しました。マキさん、ありがとう！

むつみさま：ちょっと違うが同じような話。20 歳頃、新宿花園神社内で、夜な夜な小さなテントにほんのりあかり、状況劇場（劇団名）でした。オレはデッサンばかりで其処には近づけなかったが友人がはまりこんでいました。10 歳の頃、大阪の具体美術（団体名）のニュースが、映画館のニュースでも流れていました。このふたつとも、その当時は全く無関心でしたが、今は大好きです。当時学生デモが象徴するように「古いものを 古い体制を 破壊せよ」という旋風が吹き荒れていました。その風に押されアートの世界も驚くような表現、形態、思想「なんだこれ」「これがアート」「こんなものは ちがうよ」とさんざん批判を浴びながらむくむく現れた数々のアート、半世紀以上も経った今「面白いねえ」と人々に言われるようになった。

東北はオレにとって今も若い頃も遠い、距離的にも精神的にも。先日槍ヶ岳の帰り、バスセンターからアカンダナに向かうすぐに平尾神社があり、そこに古民家の蕎麦屋、民族博物館、無料の露天風呂があった。それこそ柳田・宮本といった民俗学のヒトが活躍した時代を髣髴させる雰囲気。100 年 200 年経った茅葺の日本民家、炉がきってあり熊の毛革が寝そべっていた。温泉はコンクリートと岩とを組み合わせた湯船に黒いホースで湯があふれ出していた。後ろは雑木の木立、その後ろは森、そのまた後ろは大きな山、こういう風景が日本各地に、それぞれの場所にそれぞれの風習文化が色濃く残っていた、というようにぞっとするほど懐かしく嬉しかった。今でこそ田舎のどこの観光地に行っても古民家を改築した民族博物館、馬や牛の部屋、土間の台所、板の間、木製の農機具やら船・漁具の類、二階には蚕を飼ったり積み荷を置いたり・・・当然その頃のヒトがいればお国言葉で語り合い、貧しい食事、悲しい話、オドロオドロしい話、次々出てきたことだろう。

東北はオレにとって今も若い頃も遠いとはいいいながら、京都圏にはない異質の世界、観たい、触れたい、感じてみたいことがたくさんあると思うようになってきた。多分オレ自身の生き方、考え方、身の処し方が若い頃と変わってきたことが原因か。人生の転機があったわけではないが、「そんなことは どうでもいいじゃないか」「仕様もないことに こだわらず 気にせず ぼお～っと生きよう」というような人生観になってきた。このように思うのはつい最近のこと、今までは街の人々と同様地位も、名誉も、金も、欲しかった「生活が 仕事が」と生きてきた、そういうことがふとばかばかしくなり、何があったのか感じたのか、自分ではわからないが、そういうようになってきた。京都の近辺に住み、電車の駅の近辺に住み、大都会の近辺に住んでいるが、ここはもう終の棲家だが、これもまた人生。

渡辺大門著<人身売買・奴隷・拉致の日本史>年度初めに“耳塚”を見学するという声を聞いた。人権・差別ということで朝鮮通信使の話が人権につながっているのは何故なのかと不思議に思いつつ、ネットを開いてみると、朝鮮とか朝鮮通信使に対する書き込みがたくさんあった、これがヘイトスピーチなのか、言われなき差別なのか、真実なのか、いずれにしてもこういう書き込みを読むのはつらい。

文禄・慶長の役とは秀吉が中国の“明”征服を目指し、朝鮮半島に出兵した一連の戦争である。秀吉は対馬の宋義智（よしとし）が朝鮮と交流していたことから対朝鮮交渉を命じている。第一に朝鮮を日本に服従させること、第二に日本が明を征服する際の先導役を務めさせること、という無謀なものだった。ところが朝鮮との関係を憂慮した宋義智は秀吉の意向をそのまま伝えなかった。秀吉が日本国王に就任したこと、その祝賀に通信使を派遣するよう依頼した。この対応が後に大きな誤解を生み交渉は決裂し日本は朝鮮半島に侵攻する。文禄・慶長の役には、日本の戦国大名がこぞって参加、半島への侵攻とともに、いわゆる乱取り（奴隷狩り）がおこなわれた。1) 百姓町民に米銭金銀を化してはならない。2) 飢餓に苦しむ百姓を助けること。3) 放火禁止、とらえた男女は元に戻すこと。秀吉の方針であった。いざ朝鮮半島で戦争が始まると、秀吉の命は無視され雑兵らは「乱取り」に夢中になった。

◎「高麗で2.3の城を攻め落とし、男女を生け捕りにして、日々送っていた。首を積んだ船があるようだが、私は見たことがない。男女を積んだ船は見た」軍功を認めてもらうために秀吉の元に首を送っていたが、おびたしい重量になったので、のちに首ではなく耳や鼻が持ち帰った。それを供養したのが耳塚（鼻塚）であり、現在の豊国神社前にある。◎島津軍が明・朝鮮の連合軍3万人を討ち取り埋めたという。◎加藤清正軍<本山豊前守安政父子戦功覚書>では戦闘員・非戦闘員を問わず、鼻をどれだけ獲るかを競った感がある。朝鮮半島で生け捕った男女が日本に送られた。多くの朝鮮人が日本に拉致され、売買されることになった。強制的に日本に拉致された朝鮮人は主に九州各地に住んでいた、島津の領内だけで3.7万人にもおよび、陶磁器の仕事をしていた。このころ平戸・長崎は朝鮮人を売買する奴隷市場として知られていた。人買商人たちが奴隷を買いあさりポルトガルにも転売して巨万の富を得ていた。

◎医僧の慶念が顕した<朝鮮日々記：ひなみき>

日本からさまざまな商人たちが朝鮮にやってきましたが、その中に人商いをするものも来ていた。奥陣の後をついて歩いて、老若男女を買くと、首に縄を括りつけて一箇所に集めた。買った朝鮮人を追いたて走らせる様は、さながら阿防羅刹（地獄の鬼）が罪人を攻める様子を思い浮かべる。

◎侍医の永年<延陵世鑑よかがみ>

高橋勢が往来するごとに、朝鮮から老若男女を問わず、生け捕られて奴隷となった者が来た。その数は何百人いたかわからない。そのような中にも、幸運な女性は妻妾となり、男は主人から許可を得て妻子をもうけ生活する者があった。長生きした者は、慶安、承応まで存命し、その子孫も多い。

当時の朝鮮から連れられた人たちが、そのまた反対に、朝鮮で捕らえられた日本人のだれそれが、このように暮らした、このようになっていったということが縷々述べられている。思うに当時の戦国時代、日本国内での戦争で、攻め入って殺す、奪う、焼く、奴隷として人を狩る、売買するというようなことが常時普通におこなわれていたのかもしれない、戦闘員・非戦闘員に関わらず全てを踏み潰し、蹂躪し、壊滅していったのかもしれない。それが普通にヒトの性で、明日の命もわからない、殺し殺される、食うか食われるか、「まことに無情」と淡々と生きることが人生だったのか。「負けてはいけない」「絶対に勝つ」おのれに言い聞かせ、その決意を強く心に秘め、ことあるごとに戦いとして生きていくのが人生だったのか。もうひとつ思うのは、当時の発想として、秀吉の発想として、「朝鮮を経由して 明を征服する 明を奪って 我が物にする」本当に考えていたのか。次に、そんな日本に簡単にどんどん攻め入れられ、成敗される明・朝鮮連合軍だったのか、そんなに弱体だったのか・・・。

渡辺大門著<人身売買・奴隷・拉致の日本史>もう少し時代をさかのぼると同じような無茶苦茶ぶりが載っている、肉食の獣、恐ろしいと思わず引き下がってしまうような動物でも、同胞同士の殺戮は少ないそうだが、ヒトはヒトを大量虐殺、大量拉致ということは時と場所を選ばず発生するのもかもしれない。ヒトの知能は「これ以上はいけない」「これはしてはいけない」というラインを自ら創りながらそのラインを超えるラインを創ってしまう知恵が出せる動物なのか。とにかく人権なんて言葉以前の問題で、虐殺、拉致はいつもヒトの手によってヒトに対しておこなわれる。もうひとつが人身売買の話。拉致によって得たヒトという商品、貧困によって売らなければならなかったヒトという商品、これを扱う商人、商品としての受け皿、商品の生涯を奴隷として動ける間、力のある期間労働力として使用し、使用後は破棄ということだろうね。同じヒトとして、「抵抗し は向い 戦った」ヒトは少なかつたらう。「悔しい 悲しい 苦しい」の聲が聞こえる。

寛喜の大飢饉 1230 年～。不順な天候が続き、武蔵野国金子郷（埼玉県入間郡）美濃国蒔田荘（岐阜県大垣市） 初夏にもかかわらず雪が降った。冷夏・長雨・霜降り・洪水・暴風雨・冷害・翌年の猛暑・早魃。

藤原定家著日記<名月記>京都や鎌倉に生活困窮者が流入し、餓死者の死臭が漂っていた。幕府は備蓄米を放出し、年号を改め、鶴岡八幡宮などで国土豊年の祈祷が執り行われた。

寛喜三年餓死者が続出したため、餓え人が富家に奴婢になった者については、主人の養育した功勞を認め、その奴婢になることを認める。人身売買の罪は重いものである。しかし飢饉の年に限り許可する。時、所によっての違いはあるが、人身売買は表向き許可されていなかったようだが、売買された奴婢はいつでもどこでもたくさんいた。

◎昔、歴史の授業で習った単語が出てきた「御成敗式目」1232 年貞永元年、鎌倉幕府の執権：北条泰時の命により制定された武家の最初の成文法典である。内容は寺社関係、守護地頭などの組織、土地関係、刑事法、親族相続法、告訴手続きなど多岐にわたる。そのなかの人身売買について「人を誘拐すること 人を誘い出す科は 法令で定めるところで 軽い罪ではない」古代から人の誘拐、売買が横行していた。

◎説教浄瑠璃<さんせう大夫>（森鷗外：山椒大夫のモデル）筑紫の国に配流となった父を慕い、安寿と厨子王は母と乳母の四人で旅に出た。一行は越後の国直江津で、人さらいにだまされ舟に乗ると、安寿と厨子王姉弟は丹後由良へ、母は佐渡島へと引き離され、高貴な身分から奴隷身分へと零落する。母は足の筋を切られ、鳥追いをさせられる。姉弟は山椒大夫の奴隷となるが、姉は弟を逃亡させた。姉はその科で殺された。弟の厨子王はのちに都で栄達を遂げ丹後五郡の領主となり、山椒大夫を極刑に処し、母と再開し、故郷に戻った。

◎倭寇の話：倭寇とは「日本の侵寇」「日本の賊」という意味があり、盗賊団のようなものだろう。活動期間は 14 世紀なかばから 15 世紀初頭まで。朝鮮半島、中国大陸の沿岸から内陸部、南洋方面の海域と広範囲に及んだ。倭寇は物資に限らず人間までも略奪の対象とした。日本に連行されたヒトを「被慮人ひりよにん」と称する。

<高麗史>倭寇が 1388 年朝鮮半島の全羅・慶尚・楊広の三道に侵攻した。50 艘あまりの船団で千余人を連れ去った。

<皇明太祖実録>1373 年 倭寇による人の殺戮が問題になり、水軍を充実させ、周辺海域をパトロールさせることになった。当時の大明国が倭寇の被害に頭を悩ませていたようすが伺える。

<老松堂日本行録>1420 年朝鮮の官僚：宋希璟が四代將軍足利義持の派遣使節の回礼使として日本を訪れた時の日本紀行文。当時の西日本の社会、風俗、海賊、等が載った貴重な資料。「日本で漁師が魚を獲っていた わたしの舟に近づき魚を売ろうとした 中国人が中において物乞いをした 慣れない漁業を手伝い 食料にも事欠く有様 中国人が奴隷となって日本にいる 辛苦に耐えられないので 連れて帰ってくれないかと泣きたのんできた」と記されている。

何故拉致をするのか。日本は争乱に明け暮れ、農地は荒れ収穫がなく食糧が不足した。農地を耕作する人間と食料を国内で調達することが困難なので、必然的に国外へ求めざるを得ない。拉致した中国・朝鮮人を購入し農作業に従事させた。農業以外に牧畜、漁業、運搬、通訳（当時の日本は中国語が公用語）、中国・朝鮮への案内人（倭寇の案内人）というように奴隷を使用した。

ICレコーダーの録音よりのぼやき節です。

◎京都大学芦生研究林入林制限「銃器による日本鹿の捕獲を実施するため下記の期間・・・絶対に林内に立ち寄らないで下さい」との張り紙「今じゃないの・・・午前9時までだと 明日の朝は 9時まで うろうろしては いけないねえ」「植生と 豊かな森を 守るため 有害鳥獣捕獲・・・」「オレも有害かな」「鉄砲で 撃たれんように セント・・・」

◎利用者の皆様へ「芦生演習林は教育 研究のために 設置されています 歩道林道以外に立ち寄らない 立ち木・動植物・菌類・石類等の採取禁止」とにかくここは入山許可がある。「許可を得られましたか」「研究者の方ですか」テント2泊の許可は事前に得ているが、「しょうもないこと オレにきくな もっとぼろぼろになるまで 研究せよ」なんて小声でぼやいた。機材の破壊、盗難があるとか、土壌を踏み荒らすとかがあるらしいが、自由人のオレにとって、自由が無い場所、許可がある場所、やりづらいねえ。

◎夕方の5時、薄暗くなってきた、月が半分欠けている、トキノキが半分褐色に半分黄色に枯れた葉。周りの山々の木が黄葉しかけているが、半月前に槍ヶ岳の黄葉を、その壮観さを見てしまった今、感動が薄れるねえ。

◎6時に目覚めた、ぐっすり寝た、8時からシラフに潜りこんでそのまま寝入った。外に出ると空が明るくなりかけている、太陽が出そうだという場所が明るい。緑も赤も黄も夜露で濡れている。テントの内側は結露して壁際は濡れる、狭いテント、濡れるのは仕方が無い。大阪に帰ってくると、いつものことだが、いろんなものがずっしり湿っている。

◎テント場のそばに張り紙「Tea Bag 3年間 土壌埋没実験 ご協力ください」「パンツじゃなく、お茶・紅茶の袋を埋めているの?」「3年の分解過程で 何か とてつもないものが 包含されているか 放出されるか 発見するか」「国の金を使って 仕様もない研究 自分の家の庭ですれば・・・」「オレの 読みまちがい であることを・・・」

◎歩き出した、尾根に出た、おだやかな森、大きな木、黄色い葉っぱがハラハラ、色でいうならイエローのミドルかな、風が吹けばハラハラ、これには涙しないねえ、ハラハラに感動しないヒトの絵は売れないねえ。

◎チリンチリン鈴の音、ハーハーと息せく声の録音。米粒の半分ぐらいの赤い球体、ライトレッドにイエローを少し混ぜた鮮やかなまっかっか。花と思ひ払いのけたが、足がある、クモか虫か。違う木の下にもいた、写真に撮って帰ればわかるかとも思ひながら横を見ると、親指大のま新しい穴。よく見ると中に何かがある「へび」とあわてたが、これも撮らねばと撮るにはとつたが、帰って見るとピントがあまい、何がなんだかわからない、虫と蛇にしておこう。

◎大きな木に巻きついた腕ぐらいの太さの蔓を刃物でぶつ切り切っている、これはプロに仕事だねえ「オレも切るよ 指ぐらいの 太さなら」刃物が無くても引きちぎって折り曲げれば切れる、「木が喜ぶか 蔦が悲しむか」

◎演習林の中ぐるりと歩きましょうと出発。道も標識も無い、「どこから登る ええい この尾根に取り付けば 道があるはず」と急斜面を右へ左へ進みながら登った。帰るときは簡単に下れた、最初登るときに「ここじゃないかな」と思ったところが登山道だった。1時間もすると道のような、ひょっとすると獣道かな、というところを進んだ。演習林の中と軽くみたかな、水は500CC、ヘッドランプもヤッケもない、もちろん食料だけは欠かさないが。「かさ峠かな ここは」この山は標識も目印のテープも無い、山の名前、峠の名前がわからない、道しるべも無い。

◎空、信州のように真っ青の青ではないけれども、うすぼんやりはしているけれども青い。「木がいいねえ 太い木が天をつきさしている 枯れた木もいい きのこをいっぱいつけている 倒れた木もいい 朽ちて 土になっていつている こいつらみんな 精霊を宿している いいねえ」

◎迷っている、ここがどこかがわからない。この山には標識も矢印も小さい板つきれに書かれた山の名前さえない。「ここはどこだあ」地図の磁石、縮尺の小さい地図、グネグネ蛇行の尾根道、磁石も頼りにできない「北か北北西か」「今は2時 まだまだ引き返す というてがある 大丈夫だ」

◎なんだかピークに着いた、そこに林道がある、軽自動車を通れるぐらいのガタゴト道「かさ峠・中山方面」の矢印だが、どうも怪しい、「ここはどこだあ」林道を行ってみようと歩き出したが10分も下ると行き止まり「引返そう 何とか日暮れまでに 急斜面を通過したい よし引返すぞ」

◎L字型 1Mぐらいの長さの白い杭、上部が赤く塗られ「見出杭 M-6」なんて書かれている、何の杭かな。

◎全くヒトに会わない、静寂の山、許可が要るからヒトがいないのか。枝がこすれる音、枯れ葉が落ちる音。

◎3時：かさ峠と思われるところで小休止。スティックタイプのパンと水を少々。今日は500MLしか水をもっていない、いつもなら1Lぐらいいは飲むのだけれど、酒を飲んだ翌日はたくさん水を飲むのだけれど、不思議と渴きがやってこない。コースタイムではあと1時間ぐらいい、4時にはぐるりと回って麓までつける、「なかなか がんばる おじんパワー いやあ あの急斜面 引返して ヘッドランプなしで 下るのは やばいもんねえ」今頃の季節、日が暮れるのが早い、山の中では4時になれば暗くなる、春の季節より1時間も2時間も早い夕暮れ、「時間を気にしていない ランプはない ダウンはあるが ヤッケもない 軽いハイキングだと いささかあまくみていた いけないねえ 反省だ」

◎4時まえ：いやあ、下った、無事に着いた。しかも崖ではなくなだらかな斜面、朝登るときに「取り付きは こじやねえかな」と思ったところが正解だった。ここから歩いて30分、帰り着けば川で冷やしているビールだ。

◎またまたお神酒をたっぷりいただいて、今朝の6時、あああ、よく寝た。雨がバタバタ、風がぴゅーぴゅー、寝ながらも頭の隅に残っているが、ほとんど目覚めることもなく朝までぐっすり眠れた。テントの外にでると薄墨色の空、青空が少し、あそこから陽が登りそうと思われるあたりがピンク色だ。どこからか、鳥の声、獣の唸り、フィーフィーピーピー フォーフォー 聴こえる、昨日は聴こえなかったがなぜ今日聴こえるのかな。

◎朝：湿原を歩き出した。「今日は 鉄砲撃ちは いない 9時前でも 大丈夫」ここは由良川の最上部だそうだ。水は澄んできれいだけれど、この川の水をすくって飲みたくない、よほど乾けば飲むが、関西の川は、こんな最上流の澄んだ水でも、川底がなんだか濁っている、信州の川ではそんなことはない、信州では流れがあればすくって飲んでいるが、ここのはちょっとである。そのてん湧き水はいい、どんなところでもほとんどが旨い、土を潜ってくる水は臭みや癖が消え、土の味を浸みこませるのか。30センチをこえる大ミミズ発見。でかい、安威川でよく見る奴は20センチだ、オレは線虫類がどうも苦手、いやだねえ。

◎風がぴゅーぴゅー吹く音が録音されている。だだっ広い谷筋、1000円で買った長靴が大いに役立つ。ここに来る前に長靴が要りそうということでいくつかの店を見た。1000円から5000円ぐらいまでいく種類もある。ええい今回は1000円でいいと買ったが重宝だ。水のなかをジャブジャブ、少々の上り下りも平気だ、テントにいても、ちょっとトイレ、ちょっと水汲み、登山靴より便利だけれど、何しろかさが高い、リュックに入りきらないのが欠点だ。こんな小さい川でも大雨になれば、激流：鉄砲水に変身するのだろう。全くの素晴らしい自然、きれいな森。元気な巨木、倒れた巨木、倒れていても根の一部が地に生えている、葉もまだ茂っている奴、倒れた巨木にはキノコがたくさん生えている、生々しく旨くただけそうな立派なキノコ、糞のような塊のキノコ、腰掛のようなキノコ、押すとぴゅーっと胞子が出るキノコ。枯れた巨木の周りには弱々しい幼な木があっちこちに、どいつが次の巨木になるのかな。

◎標識がある<柗上谷>昔はここら辺りにもヒトが住んでいた、暮らしていたのはもう少し人里かもしれないが、ヒトが入って、木の世話、炭焼き、薪とり、貧しく暮らしていたんだらうね。秋風が吹いてちょっと寒い、とはいえ手袋がまだ要らないねえ。鳥の声はあちこちで聴こえるが、姿を見た瞬間にさっとどこかに行ってしまう、鳥を撮るカメラマンはたいしたものだ、鳥の、動物の習性や行動を知らないとは撮れないもんね。風の音がゴー。

◎おお、これは熊かな。オレの手ぐらいいの足跡、爪の部分で土をかいている、水を飲んで上に駆け上がったのか、これがほんとの熊手、なんて洒落ていられない、ここは熊さんが多いんだ、先ほども木の幹に真新しい爪あとが古い爪あとのそばにあった、ちりんちりんは必需品。

◎川は水深20センチ、巾は2.3メートル。細い木が密集している、なんの木かはわからないが、今までの巨木と違って、細く低い、腕ぐらいいの太さ、背も3.4メートル、若葉のような葉っぱがひらひら、これはまたいい景色だ。アトリエのことを思い出した。帰ったら描かねば、雑用はそっちのけにして、アトリエに入ったら「まずは 絵を見る まずは筆をとる 約束だあ まっててねえ」

◎カーミン色の団子、小ぶりのアケビ大の団子が密集して垂れ下がっている、ショウキ欄と書いてある。「鹿等の食害予防のためネットを設置：研究者名」パソコンネットで調べたが見つからない。紫色のきれいな欄の花は見つけたが、このカーミンとバイオレットが結びつかない、ナンなんでしょうね。